

デジタル資源の活用を進め社会的学問的ニーズを満たす 目録作成における RDA (Resource Description & Access) の可能性について

東京大学経済学図書館所蔵アダム・スミス文庫
NACSIS-CAT 書誌レコード修正作業を通して

岡 田 智 佳 子

1. はじめに

2016 年 10 月から 12 月にかけて、JSPS 科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「デジタル資源を活用した A・スミス経済思想の多元的学際的構造分析の新たな試み」(課題番号: 26590031、代表者: 小野塚知二・東京大学教授)の一貫として、デジタルアーカイブ化された東京大学経済学図書館所蔵アダム・スミス文庫の更なる利活用を推し進め、かつ、「社会的学問的」¹⁾ニーズを満たす目録作成を目的として、当該文庫 NACSIS-CAT²⁾登録経済書誌レコードに対して RDA (Resource Description & Access) による修正を試みる機会を得た³⁾。

2010 年に制定され、欧米を中心とした海外主要図書館等の目録規則として採用されるなど世界標準のルールになりつつある RDA ではあるが、西洋古典籍等の稀覯本整理についての評価はまだ定まっておらず⁴⁾、また日本国内では、RDA 導入事例自体が少なく RDA 準拠の書誌レコードを作成・修正する試み自体がユニークであることから、当該修正作業についての報告及び当該作業を通して得た知見について、本稿にまとめる。

2. 作業方針決定まで

2.1. デジタルアーカイブのオンライン・アクセシビリティとメタデータの重要性

総務省の「デジタルアーカイブの構築・連携の

ためのガイドライン」では、デジタルアーカイブの基本的なメリットを、「誰でも、いつでも、どこからでも、有用な知的資産にアクセスできること」と定義している⁵⁾。

これを実現するためには、単に資料をデジタル化してネット上で公開するだけではなく、求める資料が「そこにあること」を求める人が気づくための仕掛け、オンライン・アクセシビリティの向上のための工夫が必須である。その一つが「メタデータ」であり、適切なメタデータが準備できるか否かは、「メタデータを作成するための基準(メタデータスキーマ)」に何を選ぶか、どのようにするか大きく依存する。

2.2. 東京大学 OPAC と NACSIS-CAT 書誌レコード

東京大学経済学図書館の「西洋古典籍デジタルアーカイブ」でも、設計時に利用者にとってのアクセシビリティは当然ながら考慮され、結果、公開用インターフェースとして東京大学 OPAC が選ばれている⁶⁾。

インターフェースとして東京大学 OPAC を選ぶということは、同時にメタデータに図書目録データ、具体的には NACSIS-CAT 図書書誌レコードを採用するということを意味する。その結果、目録データの作成基準等(メタデータスキーマ)も NACSIS-CAT に依存する形となり、『英米目録規則』第 2 版 (Anglo-American Cataloguing Rules,

2nd ed. = AACR2) を採用してのスタートとなっている。

2.3. NACSIS-CAT 書誌レコード修正の理由

今回、社会的学問的ニーズを満たす目録の検討に際し、最初から、NACSIS-CAT 図書書誌レコードベースで進めていくという制約があったわけではない。これまでにまとめられた学術的に非常に重要ないくつかの当該アダム・スミス文庫に関する目録は、いずれも冊子体で刊行されており、今回の目録の発表媒体としても冊子体は当然ながら候補に入っている。冊子体での刊行が主目的であれば、編集ソフト等での修正作業も可能である。

しかしながら、次の 2 つの理由により今回は、NACSIS-CAT 書誌レコードを直接修正する方法を採用した。

一つは、アダム・スミス文庫の原資料を確認する手段としては「西洋古典籍デジタルアーカイブ」が事実上メインであり、その利活用を推進するには、そのメタデータである NACSIS-CAT 書誌レコードの記述の充実が不可避であること。

もう一つは、NACSIS-CAT が CiNii Books⁷⁾として一般公開されていることの利点である。業務用データベースである NACSIS-CAT と異なり、研究者をメインターゲットとした学術情報プラットフォームである CiNii Books では、研究者の求めるあらゆるニーズに応える機能を実装している。これはすなわち、今回の目的である「社会的学問的ニーズを満たす」ことと同じ方向性といえる。また、CiNii Books では、登録データの抽出が容易で、個別・一括共に複数のフォーマットでのダウンロードが可能である。このことから、NACSIS-CAT 書誌レコードを直接修正することが将来的な冊子体刊行への準備としても非常に合理的かつ有効であるとも言える。

なお、NACSIS-CAT については、「2020 年問題」⁸⁾を根拠に、近い将来における運用安定性及

びデータベース品質保持の不安への指摘があるかもしれない。しかしながら、「2020 年問題」についてのこれまでの運営側からの発言を振り返ると、「NACSIS-CAT のサービス終了」とのユーザ側の懸念がまず否定され、その後の運用合理化の議論においても、NACSIS-CAT が従来日本の学術振興に果たしてきた役割と我が国の学術情報インフラとしての重要性とを追認し、代替不能サービスであることを再確認しているような印象を受ける。今後のシステムの構成変更や運用形態の微調整に伴って、2020 年という節目を機に「NACSIS-CAT」という名称が変わる可能性はあるかもしれないが⁹⁾、その将来的な継続性自体については特段不安視する材料はないと思われる。

3. なぜ RDA なのか？

3.1. RDA とは

では、なぜ今回の作業で目録を記述するフォーマットとして RDA を採用することになったのか。

RDA とは、2010 年に AACR2 の後継として制定された図書館目録の新基準である。AACR2 の後であるため、当初は「AACR3」との名称を前提として検討されていたが、最終的に「AACR」を構成する単語 (Anglo America Cataloguing Rules) のいずれも含まない、全く別の新たな名称となった。

このことから明らかなように、RDA では、いくつかの大きな変換が行われている。

3.2. 「目的」の変化

まず、大きな変換の一点目は、その「目的」である。AACR2 は、カード目録に象徴されるような「図書館の所蔵目録を作成するための規則」だったが、RDA では、「(図書館が所蔵している資料に限らず) 広く情報資源を発見するためのツールを作成するための指針」へと、その目的が大きく変化した¹⁰⁾。

3.3. 国際化

そして、二点目は、「英語をベースとした目録規則からの脱却」である。AACR2 でも、当然ながら多言語への言及はあったが、目録用言語を英語に定める等、英語圏をベースとした世界観となっていることは否めなかった。それが RDA では、記述に用いる言語などの面で英語圏偏重を改め、その名称からも“Anglo-American”を外し、国際的な普及を志向していることが伺える。

3.4. 「転記の原則」の徹底

変革の三点目は、『転記の原則』の徹底」である。「転記の原則」とは、「その資料に表示されているままに目録に記録すること」を意味し、図書館目録規則における主要な規定の一つである。

AACR2 においてもこの「転記の原則」は規定されていたが、記述スペースに制約があるカード目録の名残から、資料にあるがまま・見たままの記述より、資料上の表示を基に重要な情報を選別し、よりコンパクトに記録することを重視する規則となっていた。

具体的には、著者が3人以上の場合1人以外を省略する「3のルール」や「略語・ラテン語の使用」等の各種規定であり、情報源¹¹⁾上の表示から目録作成者(カタログガー)が取捨選択した上で記述するという考え方であった。

それらが、RDA では撤廃され、「その資料に表示されているまま」の記述が可能となった。その結果、RDA に基づき作成された目録データは、AACR2 に比べ、格段に読み取り易さが増し、目録規則についての深い理解を有しているわけではないだろう多くの研究者にとって、大きなメリットと考えられる。

3.5. RDA における「自由度」

四点目は、記述における目録作成者の「裁量」「自由度」の大きさである。

RDA には、「コア・エレメント」という最低限の必須項目(たとえば、タイトル、著者名等)が

定められており、これらの項目は必ず記録することになっているが、それ以上の情報の記録については、目録作成機関の個別指針や目録作成者に任される部分が大きい¹²⁾。

稀観本を含め特殊資料の目録作成では、制約の多い既存の目録規則ではなく、独自フォーマットを使用するケースが少なくないが、このような RDA のローカルの裁量の大きさを上手く利用すれば、独自フォーマットと同様の自由な記述が可能であると考ええる。

3.6. 目録規則の国際的スタンダード

事前のヒアリングによれば、アダム・スミス文庫を研究する研究者が目録情報に求める最も重要なことは、「資料にあるがままの状態が分かる」ということであった。例えば、標題紙上の表示について、タイトルと思われる部分がどれだけ冗長であっても、責任表示が何人書かれていても、彼らに関わる説明語句が延々と続いていても、全て省略せずに目録に記述して欲しいということである。また、目録に注記したい事項も、多岐にわたる¹³⁾。

今まで述べてきたとおり、RDA は、それらすべての要望を満たしえるものといえる。その上、RDA は、事実上、目録規則として新たな世界標準でもある。

独自フォーマット作成に劣らぬ自由度の大きさと、図書館界の世界的スタンダードに準拠することで得られる安定性及び汎用性の高さ、これらが同時に成り立つことから、今回「RDA に基づく NACSIS-CAT 図書書誌レコード修正」という方法が採用された(ただし、ここでの決定は、目録作成に対する一つの案でしかなく、記述方法等における細かな規定等については引き続き検討が必要であることから、今回の修正作業は、あくまで「試行」と位置付けられるものである)。

4. 修正作業内容

以下に順を追って、実際の作業について紹介する。

なお、本作業は、目録業務歴 10 年以上（IAAL 認定試験「総合目録」合格者¹⁴⁾）であり、西洋古典籍の経験及びラテン語含む欧米言語への知識を有する担当者 2 名で行った。

4.1. 作業の目的

試行であることから本作業時の目的を、次の 3 つのポイントにしばった。

- ①情報源の状態を忠実に表現した記述内容にすること
- ②（①が困難な場合には）情報源の状態がわかる記述内容にすること
- ③目録の専門知識がないユーザにとって分かりやすい記述内容にすること

4.2. 期間・対象レコード数・概略等

①作業期間

2016 年 10 月上旬～12 月下旬

②作業対象レコード数

デジタルアーカイブ化済アダム・スミス文庫資料 199 点に対応する NACSIS-CAT 図書書誌レコード 120 件

③対象刊行年代

1520 年代～1790 年代に刊行されたもの。

④対象言語

資料本文の言語は、英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・ギリシャ語・ラテン語の 6 言語（各言語別レコード数の内訳は表 1 のとおり）。

表 1 本文の言語別書誌レコード数

言語	書誌レコード数
英語のみ	56
ラテン語のみ	27
フランス語のみ	21
イタリア語のみ	9
フランス語・イタリア語	2
ドイツ語のみ	2
英語・フランス語・ラテン語・ イタリア語	1
英語・ギリシャ語	1
英語・ラテン語	1
(合計)	120

⑤作業概略

「西洋古典籍デジタルアーカイブ」上の情報源¹⁵⁾及び水田¹⁶⁾・矢内原両目録¹⁷⁾を参照しつつ、AACR2 準拠で作成されている該当書誌レコードの記述を RDA を基に加筆・修正する。

BOOK <BB11777939> CRTDT:20130228 CRTFA:FA011769 RNWDT:20130228 RNWFA:FA011769 GMD: SMD: YEAR:1776 CNTRY:gw TTLL:ger TXTL:ger ORGL:eng ISSN: NBN: LCCN: NDLN: REPRO: GPON: OTHN: VOL: 1. Bd ISBN: PRICE: XISBN: TR: Untersuchung der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern / von Adam Smith, ... aus dem Englischen PUB: Leipzig : Weidmanns Erben und Reich, 1776 PHYS: viii, 632 p. : 21 cm NOTE: 稀覯コレクション(アダム・スミス文庫)につき記述対象資料毎に書誌レコード作成 NOTE: References: Yanai, Catalogue of Adam Smith's Library <BA06702026>, no. 125 NOTE: References: Mizuta, Adam Smith's Library (2000) <BA49074286>, no. 1546 NOTE: Eco. Lib. previous call no.: 1:207:39 AL: Smith, Adam, 1723-1790 <DA00159551> CLS: LCC: HB151

図 1 NACSIS-CAT 図書書誌レコード



図 2 デジタルアーカイブ情報源

デジタル資源の活用を進め社会的学問的ニーズを満たす目録作成における
RDA (Resource Description & Access) の可能性について
(岡田)

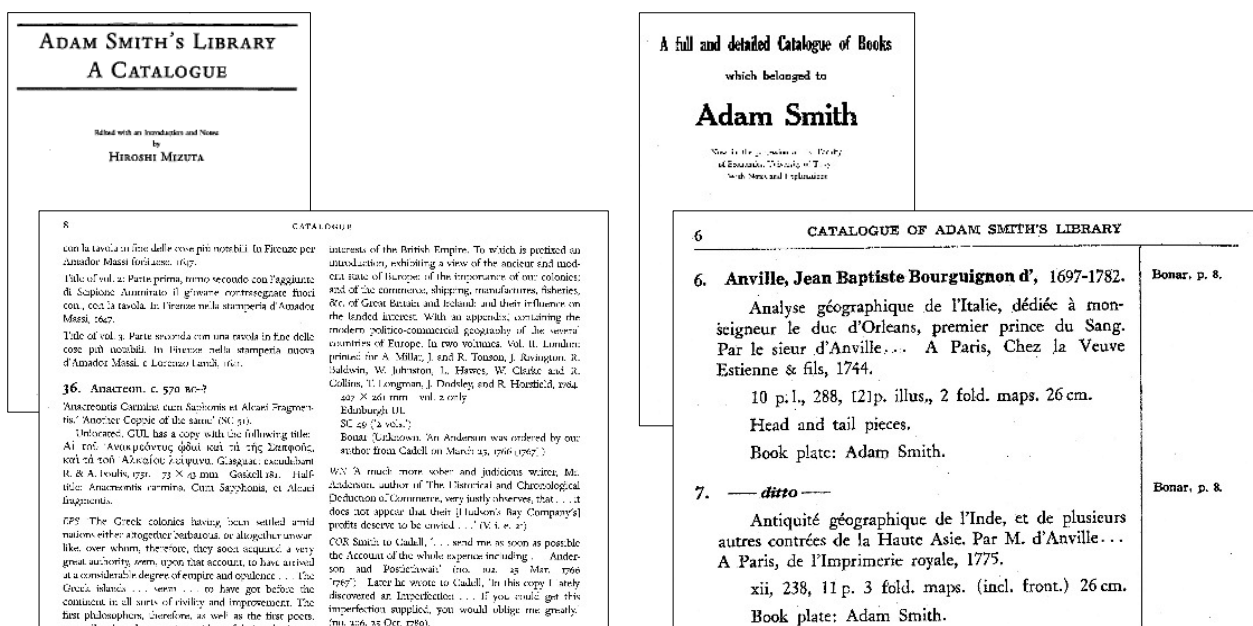


図 3 水田目録（左）・矢内原目録（右）

<例>“Untersuchung der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern.”

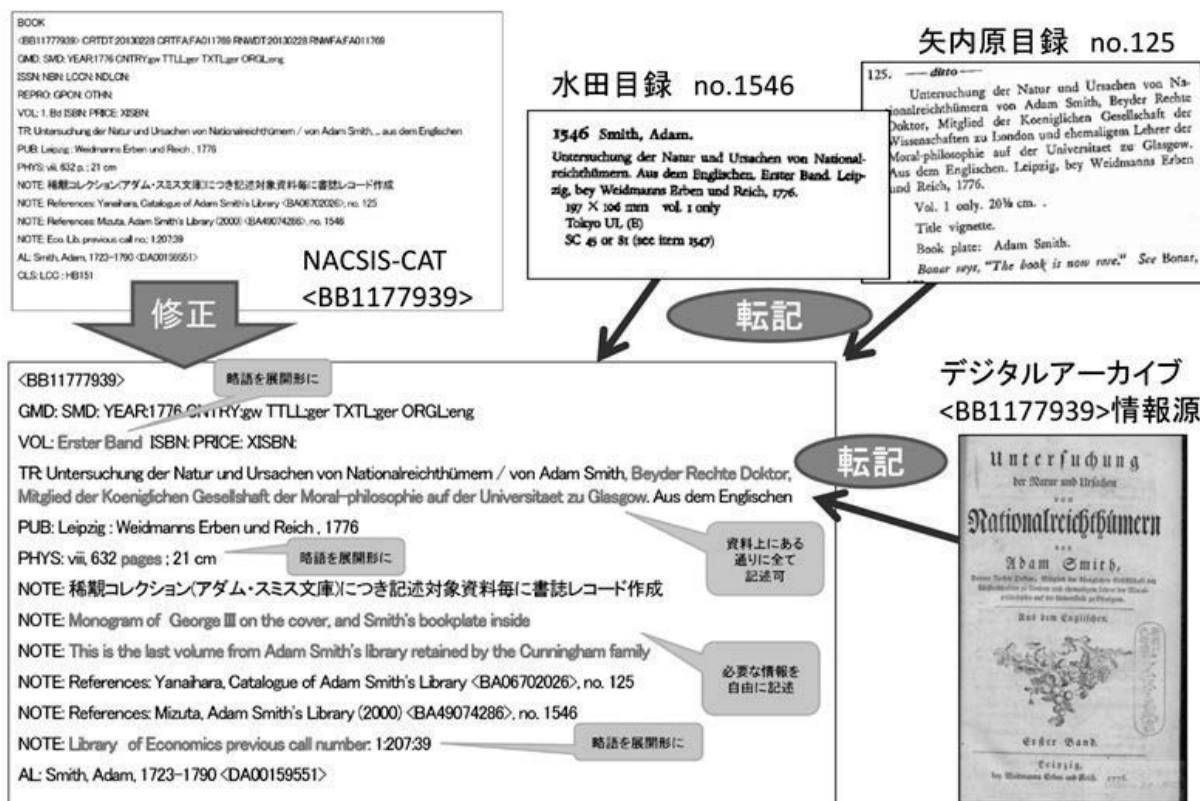


図 4 修正作業概念図

4.3. 作業手順

具体的な作業手順は次の通りである（図 1～図 4 参照）。

- ①NACSIS-CAT クライアントから、修正対象の図書書誌レコードにアクセスする。（図 1）
- ②「東京大学 OPAC」から当該資料を検索し、「西洋古典籍デジタルアーカイブ」内の情報源画像（PDF）を表示させる。（図 2）
- ③同時に、水田・矢内原、両目録の当該資料掲載ページを開く。（図 3）
- ④次の点について、RDA に基づき書誌レコードを修正する。（図 4）
 - ・略語は展開形に直す。
 - ・ラテン語は、相応する語句（英語）に直す。
 - ・タイトルに関する情報（TR フィールド）は、デジタルアーカイブの情報源を元に、表記されている内容を完全転記する。
 - ・水田・矢内原両目録から注記事項（NOTE フィールド）を転記する。
 - ・その他、適宜、注記等の追加及び既存の記述部分について、明らかに AACR2 と RDA とで書き方が異なるものについての修正等を行う。
- ⑤NACSIS-CAT にアップロード（上書き保存）し、レコード内容を確定させる。

5. 修正作業についての補足

作業時に、考慮した点、工夫した等について補足する¹⁸⁾。

5.1. 標題紙上の表示の完全転記

「情報源にあるがままの目録記述」を目指す上で、標題紙上で確認できる表示は、徹底してそのまま転記する方針を取った結果、最も修正量が多かったのは、タイトル及び責任表示に関するフィールド（TR フィールド）であった。

通常 AACR2 では省略されていた本タイトル上の冗長な表記や、責任表示の説明文等も、全て貴重な情報として書誌レコード上に追加した。古い

西洋の資料ゆえ、標題紙上の情報量が多すぎて、タイトルと思われる部分についてですら、どこまで主要なものでどこからがサブタイトルなのか、記述要素の切り分けに苦慮した部分はあったものの、全体として NACSIS-CAT のデータ長の制限¹⁹⁾を超える文字数のものはなかった。

5.2. 「大文字使用法」の取り扱い

「大文字使用法」²⁰⁾の採否についての検討も行った。RDA では、AACR2 から引き続き「大文字使用法」を採用しているが、同時に別法として、ローカル側で規定すれば不採用とすることも可能である²¹⁾。しかしながら、AACR2 準拠の NACSIS-CAT の書誌レコードにおいて、大文字ばかりのタイトルがあると、違和感だけではなく一見して初歩的なミスに間違われる等の負の影響が懸念され、「大文字使用法」については、今回はあえて採用のままとした。

ただし、それによって情報源上の表記とタイトルの記述とが異なるケースについては、“Title is in all capital letters.”等、注記で補足した。

5.3. 標題紙レイアウト

5.2 にも関連するが、タイトルが同じでも、刷によって表示の仕方やレイアウトが異なることがあるため、それぞれの状態を正確に記すことが必要になる。しかし、デザイン等に関することは、TR フィールドでは説明できないため、注記で補足した。

例えば、タイトルに色付けがされている場合には “Title in red and black.”、飾り文字がある場合には “Engraved title page.” 等と記した。

5.4. その他

その他、目立った修正としては、“Bookplate: Adam Smith.”の追記がある。デジタルアーカイブ上でアダム・スミスの蔵書票が確認できたものについては、この注記を追加した。

また、ページ番号の誤植も散見されたため、“Pages 205-214 duplicated.”等、状況について

の注記を追加した。

6. 今後検討すべき記述要素

事前の検討時に要望としてあがりつつ、今回の修正対象に含められなかったものについて、以下に列記する。

6.1. プリンターズ・マーク (Printers' Devices)

しばし資料上で確認される印刷所の商標であるプリンターズ・マーク (Printers' Devices) は、資料の来歴や特徴を識別する上で非常に重要である。図柄の説明を伴うために、NACSIS-CAT 書誌レコード上では、注記が適当ではないかと考える。

6.2. 校合式

古典籍資料では、同じ著作の同じ版でも製本状況が一律ではないため、物理的な大きさが異なることがある。そのため、資料の形態上の特徴として、その本の折り丁の構成が重視され、それをアルファベット及び数字・記号で記録したものを「きようごう校合式」と呼ぶ²²⁾。RDA では、3.21.2.9 “Early Printed Resources” が該当する。“Signatures:”の導入語句に続けて記録するよう規定されている。NACSIS-CAT 書誌レコード上では、注記としての記述が適当ではないかと考える。

6.3. 判型 (Book Format)

一般の図書館目録では、資料の形態に関する事項は、「数量」(主としてページ数)及び「大きさ」(資料の「高さ」とで記録し、通常、判型については記録することはない。しかしながら、6.2 同様、古典籍資料では、判型も重要な情報である。RDA では、3.12.1.3 “Recording Book Format” が該当する。判型リストから相応するものを選択し記述するよう規定されているが、NACSIS-CAT レコード上では、形態に関する事項、または、注記としての記述が適当ではないかと考える。

6.4. 書き入れ・書き込み

資料全体において確認できるあらゆる書き入

れ・書き込みについての記録も、重要な情報となる。ただし、内容が多岐に渡るため、如何にそれを系統だって記述するかについて十分な検討が必要である。NACSIS-CAT では、たとえば、書き入れ・書き込みの種類に応じて導入語句を決めておいた上で注記に記述する等の方法が考えられる。

6.5. 資料の来歴

古典籍資料全般に共通することではあるが、その資料の来歴についての情報も非常に貴重であり、目録上で確認できると資料判別に役立つ。6.3 同様、記述のルールを決めた上で注記する方法が有効と考える。

また、RDA では、22 章“AGENTS ASSOCIATED WITH AN ITEM”にて、その Item (個別資料)に関連した Agents について重要と判断される場合には、著者標目として抽出してよい、と書かれている。今後の検討になるが、アダム・スミス自身を含め、歴代の蔵書家に関する情報を著者標目として抽出し、系統だって管理することも可能である。

7. おわりに

一言に「目録」といっても、書誌学者のイメージするものと、我々カタログガーがイメージするものとは大きく異なる。ましてや、今回の“課題”—アダム・スミス文庫を研究対象とする研究者が求める理想の「目録」—に対して、カタログガー視点から、どれほど有効な提案ができたかについては心もとない部分はある。

ただ、RDA という方向性について、間違いではないのではないかという確信は、作業を経た今、より強くなっている。

世界に比べ出遅れた感はあるものの、日本の図書館界でも、ようやく RDA 準拠の流れが始まろうとしている。直近では、RDA に準拠した「日本目録規則 (NCR) 2018 年版 (仮称)」が 2018 年度

内に発表される予定である。また、今回の作業を行った NACSIS-CAT においても、今後の RDA 準拠予定が明言されている²³⁾。確実に RDA が世界のみならず日本の図書館界の標準的な目録規則になる日が近づいている。

今回の修正作業は、RDA の可能性の一部を提示しただけのものではあるが、作業を通して RDA を読めば読むほど、RDA が包み込もうとしている世界の大きさを知ることになった。どんな Resource でも、十分に記述し、アクセシビリティを向上させうる可能性を持つ、目録の新しいスタンダードである RDA。今回の作業が、研究者の目

指す、社会的学問的ニーズを満たしたアダム・スミス文庫の新目録作成の一助になっていれば幸甚である。

最後に、貴重な作業に参加させていただいた感謝を申し上げて擱筆する。この作業を通じてカタログが必要とされる場所がまだあるとの実感を持てたことは望外の喜びであった。関係各位に心より感謝申し上げたい。

(おかだ ちかこ：特定非営利活動法人大学図書館支援機構事務局長)

1) 『東京大学経済学部資料室年報』4, 2014, p.1.

2) 国立情報学研究所が運営する目録所在情報サービス。「西洋古典籍デジタルアーカイブ」が公開用インターフェースとする東京大学 OPAC 内目録情報の作成元である。日本の大学図書館等における学術資料(図書・雑誌)の所在情報を一元管理し、国内における学術情報の主要インフラの一つとなっている。

3) 2016 年末の作業時点では、NACSIS-CAT における洋資料の準拠する目録規則は AACR2 であり RDA は認められていなかったが、修正対象が出版物理単位毎に書誌を作成する稀観本で他 NACSIS-CAT 参加館への影響が小さいレコード群であること、研究目的であること等により、国立情報学研究所から当該修正作業について事前の許可を得ている。

4) “BSC statement on DCRM and RDA” (<https://rbms.info/dcrm/rda>) April 8, 2016. (参照 2017 年 3 月 10 日、以下同)

5) 総務省「デジタルアーカイブの構築・連携のためのガイドライン」2012 年 3 月 26 日 (www.soumu.go.jp/main_content/000153595.pdf)

6) 前掲注 1、矢野正隆「「西洋古典籍デジタルアーカイブ」の特徴と利用法」p.7。

7) 国立情報学研究所が提供する「NII 学術情報ナビゲータ (CiNii サイニィ)」の一つ。NACSIS-CAT に蓄積された全国の大学図書館等の図書・雑誌の目録所在情報を基に、各種出版 MARC の目次・内容情報をマッチングさせた表示や、HathiTrust Digital Library、国立国会図書館デジタルコレクション等の原文データベースへのリンク機能等がある。(<http://ci.nii.ac.jp/books/>)

8) NACSIS-CAT のシステム及び運用変更問題。2020 年に NACSIS-CAT を大変革するとの目標で検討が開始されたことから「2020 年問題」と称される。2020 年という節目の解釈は、当初の大改革実施年という衝撃的な意味合いから、本稿執筆時には、「(継続した検討を行う上での) 2020 年を通過点ととらえ」までトーンダウンしている。「これからの学術情報システム構築検討委員会」及び「NACSIS-CAT 検討作業部会」にて継続検討中である。(<http://www.nii.ac.jp/content/korekara/about/>)

9) 「NACSIS-CAT」との名称は、国立情報学研究所の前身である「旧学術情報センター (NACSIS)」に由来したものであり、時代遅れであるとの指摘があつて久しい。

10) 蟹瀬智弘「所蔵目録からアクセスツールへ RDA (Resource Description and Access) が拓く新しい情報の世界」『情報管理』56(2), pp.84-92, 2013.

11) 「情報源」とは、「書誌記述に際しよりどころとなるもの」のこと。目録規則内で記述要素ごとに具体的に規定され、たとえば、「標題紙 (タイトル・ページ)」「奥付」等が該当する。.

12) 『NDL 書誌情報ニュースレター』2013(1) (通号 24 号) (http://www.ndl.go.jp/jp/data/bib_newsletter/2013_1/article_03.html)

13) 通常、標題紙上で確認できる表示は全てが大事な情報ではあるが、AACR2 までの従来の目録規則では、その表示された情報が多ければ多いほどそれらに優先順位をつけ、宣伝文句であるから、著者の紹介文であるから、あるいは単に冗長すぎるから等の理由により、主たる目録記述としては不要とみなされ転記しないという判断がなされている。また、注記についても、「目録作成者が必要と判断することは記述して良い」という基本的な考え方はあるものの、カード目録の名残故にコンパクトな目録志向の AACR2 では、注記すべき内容が具体

的に規定され、それに準じて取捨選択するのが一般的となっている。

- ¹⁴⁾認定 NPO 法人大学図書館支援機構(IAAL)の主催する「IAAL 大学図書館業務実務能力認定試験」の一つ。(http://www.iaal.jp/examination/index.shtml)
- ¹⁵⁾「西洋古典籍デジタルアーカイブ」(http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page_id=3760)
- ¹⁶⁾Hiroshi Mizuta (2000) *Adam Smith's library : a catalogue*. Clarendon Press, Oxford University Press
- ¹⁷⁾Tadao Yanaihara (1951) *A full and detailed catalogue of books which belonged to Adam Smith : now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with notes and explanations*. Iwanami Shoten
- ¹⁸⁾各記述要素を RDA で考える際には、その記述要素が FRBR (Functional Requirements for Bibliographic Records : 書誌レコードの機能要件) モデルで何に該当するかの言及が通常不可欠ではある。5 及び 6 にて列記した記述要素は、FRBR モデルでは、「体现形(manifestation)」または「個別資料(item)」に該当し、本来であれば、その違いを踏まえた上での説明とすべきであるが、稀観本の目録作成では、書誌単位が「体现形」=「個別資料」であり特に区別を要しないこと、そして本稿の主目的が目録規則について綿密に述べることではないこと等により、FRBR モデルについての言及は割愛した。
- ¹⁹⁾NACSIS-CAT 書誌レコードにおける「タイトル及び責任表示に関するフィールド (TR フィールド)」のフィールド長は 1024 バイト。
- ²⁰⁾「大文字使用法」とは、文字に大文字・小文字の区別を持つ言語の資料についての目録記述をする際の規定。資料上のレイアウト等によらず、その言語として正しい形(正書法)で記述するためのルールともいえる。各目録規則ごとに規定されているが、「資料中での表記の仕方にかかわらず、大文字については当該言語の慣行に従い使用するもの」との内容であることが多い。
- ²¹⁾RDA 1.10.2 Capitalization 及び 同 Alternatives.
- ²²⁾高野彰『洋書の話』第 2 版, 朗文堂, 2014.
- ²³⁾国立情報学研究所これからの学術情報システム構築検討委員会「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について (NACSIS-CAT 詳細案)」p.9, 平成 29 年 2 月 8 日 (http://www.nii.ac.jp/content/korekara/archive/korekara_doc20170208.pdf)